

分科会:福音主義神学と歴史・実践部門の争点発題（暫定的簡易版）

## 福音派神学の動向、問題、および展望

藤原淳賀

聖学院大学教授

### 序

福音派は、今日の世界におけるキリスト教の生にとって非常に重要な貢献をしてきたといえる。また一定の影響を持ってきた。

長くシカゴ大学神学部で教えてきたマーティン・マーティは 2003 年にミネアポリスで持たれた NAE(National Association of Evangelicals) Convention で福音派に対して「あなた方が勝利した (You have won)」と語った。アメリカにおける主流派との葛藤において福音派が勝利した。アメリカの主要都市における代表的教会は福音派であり、アメリカの宗教放送の約 90%は福音派がコントロールしている。アメリカの約 240 神学校のうち 70 が福音派であるが、その全神学生の半分以上は福音派であり、アメリカにおける大教会のトップ 100 は実質的に全て福音派とあってよい、と語った。

しかしゴードン・コーンウェル神学校のボブ・ウィンツ教授は、それはどのような勝利であったのか、と問う。確かに主流派教派との競争には勝ったかもしれないが、福音派運動は断片化してしまっているという。カール・ヘンリーが提唱したような社会への関わりを継承できず、1950 年代と 1960 年代には、社会の変動によく対応できなかった。市民権運動には全く関わっておらず、その恥ずかしさから今日でも十に分りカバリーできていない、という。

福音派は後述するように、ある態度を伴った運動であり、福音派の中でも多様性がある。日本では、米国の強い影響を受けながらも、米国や英国の福音派とも異なる「日本の福音派」が形成されてきており、日本独自の問題があるといつてよいであろう。

本講義の目的は、福音派全体を意識しながら、日本の福音派の問題点を指摘し、今後向かうべき一つの方向を示すことである。

福音派の現在の動向と将来への展望は、福音派の歴史と密接に関係している。またおよそ運動や実存的になされている研究というものは真空状態から生まれてくるものではなく、戦いの中から生まれてくる。その性質は、それが戦っている相手を明確にすることで見えてくる。従って、福音派の始まりと性質、そして福音派の戦いが論じられなければならない。

結論を先取りして提示するなら、私は日本の福音派の問題は、(福音派とファンダメンタリズムは異なるという主張にも関わらず見られる) ファンダメンタリスト的保守主

義的傾向性と、(聖書を重んじているにも関わらず見られる) 不十分な聖書中心主義であると考えている。

日本は 1000 年に一度といわれる東日本大震災を 2011 年 3 月 11 日に経験した。それへの対応の中で日本のキリスト教は、戦後初めて教派・教団の壁を越えたいくつもの働きや交流を経験した。これは日本の教会にとってのカイロスである。新教・旧教合わせて人口の僅か 1% のキリスト教は、様々な壁作りをするのではなく、壁を越えて協力しなければならないと考える人々が生まれてきている。これは福音派だけでなく、主流派教会でも同様である。

被災地では、それまで社会活動を軽視してきた根本主義的な教会も、被災した人びとを前に支援の働きへと押し出されてきた。支援(社会活動)と伝道は分けられるものではないという認識が否応なしに生まれてきた。ローザンヌ運動も福音派の社会的関心がある程度は後押ししたといえるであろう。

また昨今の日本社会の著しい右傾化に対して、福音派は今までに無かったほどに、反対運動というかたちではあるが、関わろうとしている。以前の世代の轍を踏むことなく、福音派もとにかく「今何かしなければ」という思いで対応をしている。これらの流れは歓迎したい。

しかしこれから必要なのは、何かに「反対するキリスト教」を越えて、代案を提示するキリスト教である。そのための(1)明確なビジョンと(2)十分な戦略が必要とされている。私は、(1)それは終末的な神の国のシャロームが中心に据えられなければならないと考えている。そしてそのイメージに基づいた、平和憲法を持つ日本のキリスト教の世界への貢献を考えるべきである。そして(2)現在の段階での戦略は、(i)日本におけるキリスト教リーダーの、また青年たちの、福音派を越えた顔が見える信頼・協力関係の構築である。これは震災後生まれた関係が暖かい内に意識的に進めなければならない。また、(ii)緊張高まる東アジア諸国のキリスト者リーダーの顔が見える信頼・協力関係のパイプがたくさん作られなければならない。政府も、企業も、NPO/NGO もできない、神の国の市民としてのキリスト者の信頼関係が作られる必要がある。また(iii)聖書に基づいた和解と平和が本気で実践されている福音的地域教会が建て上げられていく必要がある。教会が教会とならなければならない。そしてこれらを支える(iv)学問的なキリスト教的赦しと平和作りの研究と牧師たちの教育がなされていかなければならない。

## I. 福音主義の性質：その起源、性質、そして戦い

- A. 起源：宗教改革、敬虔主義、ピューリタニズム、リバイバリズム
1. 初期の教会の福音に戻るという意図：自由主義へのリアクション
  2. 宗教改革：聖書主義、信仰義認
  3. 敬虔主義：正統主義の問題とリアクションとしての敬虔主義
  4. ピューリタニズム：道徳的厳格さ
  5. リバイバリズム：リバイバルを経験したピューリタニズム  
主に英語圏とその宣教地域での運動：リバイバリズム、  
ピューリタニズム  
世界宣教

B. 自由主義へのリアクションとしての福音主義と根本主義

福音同盟会 (Evangelical Alliance、1846年ロンドンで結成) が国際的な福音主義の連合団体として19世紀に大きな影響力を持っていた。これが日本最初のプロテスタント教会である、日本基督公会の誕生に大きな影響力を持っていた。

C. 性質：聖書主義、イエス・キリストの中心性、聖霊の主権、個人的回心の必要性、伝道の緊急性、キリスト教共同体の重要性

D. 根本主義と福音主義：共通点と相違点

1. 啓蒙主義的自由主義へのリアクション
2. 根本主義的閉塞、アンチ・アカデミズムへのリアクション  
文化的キリスト教 (H.R. Niebuhr) としての根本主義と自由主義神学、そして福音主義
3. 社会への関わり (個人的回心→社会変革)

E. 福音主義の多様性：アメリカ、英国、日本 (カナダ、オーストラリア)

## II. 日本の福音主義の問題

木は実によって知られる。問題は、福音派教会に集まっている人々、福音派神学校の神学生、教師たち、福音派諸団体の人びとを見ると最もよく分かるかもしれない。

A. 熱くダイナミックな信仰理解の必要  
宗教改革、敬虔主義 vs. ファウンダーショナリスト的静的近代主義

B. 表層的聖書主義 (ビブリスム)  
福音主義は十分に聖書的生活の実践を視野に入れているだろうか。

内面的でナイーブなキリスト教

C. 根本主義的傾向

小さな壁の中に留まる傾向（→震災以後減少しているのは好ましいこと）

D. ポストモダン時代の人々への信仰の表現の必要

教父たちの聴衆、スコラ主義の聴衆、宗教改革者の聴衆、新正統主義の聴衆、ポスト・クリステンドムの聴衆、21世紀の日本の聴衆  
世界のキリスト教への貢献のために

平和主義を唱えながら、キリスト教平和主義の神学的基盤を持っていない。

### III. 福音主義の将来のために

A. 300年先を考えた教会形成・キリスト教的視野と戦略を

苦難理解、共同体の重視、より広い世界へ関わり基盤の強化  
(engineering view)、神の介入への期待（神の介入無しには不可能なことを期待する）。

B. *Ecclesia semper reformanda est* (vs. static understanding of the Gospel)

豚の角煮と宗教改革：冷たい正統主義の問題を越えて

C. 告白的神学（Barth, H.R. Niebuhr）

Theo-Centric Relativism、福音派内での相対性を認め、福音派外の人びとも関わる。彼らは敵ではなく、同じチームの違う Division にいる人々。

D. 徹底的唯一神主義（H.R. Niebuhr）

突き抜けた絶対神信仰。全ての偶像の破壊と全ての存在への敬意。

E. ラディカルな聖書主義（Yoder, Hauerwas）：「教会が教会となる」

「イエスは主なのか、それともアドバイザーの一人なのか？」  
告白的教会の形成  
キリスト者としての徳を持った弟子の人格形成

F. 平和主義のためのアナバプテスト的伝統との対話

福音派のアナバプテスト批判：分離主義（アングリカン：ピューリタン分離派の記憶）

福音派の「主流派（になりたい）メンタリティ」の問題。

ルター、ツウィングリ、カルバンは平和主義にあらず。

バルト、ニーバー兄弟、ティリッヒ、ブルンナーも。

もちろんアウグスティヌスも。

今日、平和の実践を求めていく時、様々な国で働いているメノナイトの人びとと多く会う。

- G. よりキリスト教広い共同体との関わり：東日本大震災への対応を通して
- 19世紀の開国以降、日本のキリスト教は、神学校だけでなくミッション・スクールを含めた諸団体を設立し、また社会問題を積極的に論じてきた。例えば内村鑑三や新渡戸稲造、また賀川豊彦といった人びとに見られるように、日本のキリスト教は、キリスト教信仰を心の中だけの問題とは考えてこなかった。しかし昭和期からは、恐らくキリスト教の弾圧やまたバルト神学の影響もあり、敬虔主義に特化した心の中のキリスト教へとその姿を変容させてきた。主流派も含めて昭和期以降、社会的問題に十分かわからず、あるいは避けて戦争期を迎えた。戦後も、御言葉の宣教に集中するとして、社会の問題に十分に関わってこなかった。教会が、御言葉の宣教と魂の救いを中心にして、社会運動団体のようにならないようにしたことはよく理解できる。しかし、その結果、社会から遊離した特殊な団体になる傾向がある。



<イメージ>

→魂の救いと神の国の生き方を中心にした、社会への関わりを行うキリスト教世界観が必要。

-政治的神学（キリスト教現実主義[Reinhold Niebuhr]と聖書的現

実主義[Yoder, Stassen]の橋渡し)

- ミッション・スクール、キリスト教諸団体との関係の強化
- キリスト教的世界観と適合する社会の積極的形成

弟子の共同体としての教会をコアとしてより広い世界に関わる

現状：コア無く、社会に薄く関わっている。

今の時代の（多様な）ゴールを明確化する必要。

## 結論